



理事会だより (7・8)

池田会長より、新型コロナウイルスに対する小田原へのまん延防止等重点措置は解除されたが各行事に慎重に対処して行こうと冒頭に発言あり。

一、令和3年度文化の日俳句大会について、先月理事会で事業部に一任された細部事項を含む実施内容が長谷川事業部長より説明され、投句用紙(含む返信封筒)が配布された(協会外へは一四四通)。なお寿齢者表彰の対象者につき訂正があった。(本号10頁参照)

二、秋の吟行会につき総務部岡本理事より案内。

三、第3回藤田湘子記念小田原俳句大会の実行委員会につき村場広報部長より報告。(詳細は6月理事会だより参照、投句募集は9月理事会にて)。

四、「俳句の岸辺」刊行に向け校正の最終段階と山田編集委員長より報告。(校正7/8 次回8/1)

「俳句おだわら」10句抄 (647号より)

小澤純子 抄出

十葉を干して息災なりし日々
陽の匂いゆたかに巻いて春キャベツ
健診を明日に控えて蜆汁

やすらぎは濠の水にも花は葉に
春昼の猫のごとくに熟寝(うまい)かな
食むように嬰は乳房を聖五月

花冷えや調剤室の台秤

蝌蚪ふるふ水に喝采あるごとし

嘯りや歩荷と休む古株(ふるきへ)

母の日や小銭を持つて子供客

小澤園子 抄出

かきつばた行方の知れぬ大振袖

蝌蚪ふるふ水に喝采あるごとし

サイダーの体内トンネル突つ走る

リュック背にヒール鳴らして花の街

薔薇に害虫スプレー昆虫がいけない

柏餅のんびりしている君という

でんでんむし入力ミスとエラーかな

草笛の悲しきまでのビブラート

ポップコーン弾けて鷹は鳩と化し

コロナ禍を四角に暮らし夏マスク

山崎 悦子

豊田 幸枝

加藤 健治

池田 忠山

神山つとむ

小野 菊土

池田 令子

畠 梅乃

田下 昌人

澤口 文子

佃 悦夫

畠 梅乃

小林永以子

出澤 洋子

岩楯恵津子

穂坂志げる

瀬戸 正洋

田畑ヒロ子

小島ノブヨシ

山口 千代

愚直に 田中幸子

曾我郷の水が水呼ぶ青田徑
里山を丸ごと洗ふ若葉雨
十葉のぢりぢり占領さらにな
沙羅の雨香焚き主婦業休みを
忘るるは神の計ひ水中花
尺蠖の愚直に計測長屋門
弔ひか黙黙西へ蟻の列
居酒屋は昭和ふつつ夏の夕
向日葵や負けず嫌ひの肩で泣く
白日傘お出かけ癖に翳りかな

燕の子 岩楯恵津子

青蛙まぶたとじると子守唄
夏帽子忘れ舌出す利かん坊
行水の娘に背を流す母が居た
ラムネ瓶振つて昭和に返りたり
夜の闇に海月を映す舟明かり
遊び場に声のちぎれて浜昼顔
はたた姉妹の体調狂わせり
巢から口大きく見せて燕の子
燕の子親のはみ出す巢となりぬ
我寄れば親かとさわぐ燕の子

俳句おだわら（7・19メ切り、到着順）

◆鹿火屋（6・25）

久江報

幹磨く雨となりたる百日紅

足立 和子

梅雨寒やワクチン接種終ゆ安堵

川本 育子

いさぎよく崩れし無言白牡丹

高橋 小糸

山の端に白雨きたりし夕べかな

山崎 悦子

夏燕雨の天守の屹立す

近藤 久江

◆みなみ（6・19）

かほる報

干梅の竿吊しおり尼の寺

斎藤 静

干梅をひたすら返す母の黙

加藤 健治

梅雨に入る花の形の脱臭剤

飯田 愛

機械音男一人の田植かな

小瀬村信子

守宮の子鍵のかからぬ厨窓

加藤れい子

たそがれにまだ働きし夏つばめ

村上 龍山

栗の花ちよつぴりきつい女坂

加藤 富江

曲るたび山は新たに青あらし

豊田 幸枝

生きること青葉の風からもらいけり

市川めぐみ

諍いの怒り引きずる梅雨鳥

加藤かほる

◆青梅（7・7）

辛子報

大虹や下校の子等のさわぎ出す

大塚 行人

今あり 山田照子

目に深く沁みゐてけふはみどりの日
 パンの日の焼きたてパンに若葉風
 若葉風「はこね二号」のすべり出す
 降りたてばホーム短し柿若葉
 時の日や音立てて時駆けてゆく
 退屈のなきめでたさや梅を挽ぐ
 半夏生訪ひも訪はれもなき暮し
 梅ジュース瓶ゆすりては梅に問ふ
 あるがまま生きて今あり豆の飯
 短夜や充電すべきものばかり

あじさい 須田聡子

落し蓋ほどの風あり街薄暑
 あじさいの今朝の機嫌のうすみどり
 あじさいや夫の輪廓吾を包む
 あじさいを揺らして声の届かざる
 夫の忌のあじさい匂うとの曇り
 梅雨の星はるかな先の夜のプール
 梅雨の月プールの波のすぐ消えて
 一杆のクロール胸板とよもする
 アボカドと温泉玉子夏の雨
 アボカドに梅雨の手ざわり猫帰る

老いの身に白一色の山法師

風の香は実梅の匂ひ曾我の郷

尼寺や雨に煙し合歡の花

鎌切や吾も毎日鎌を持つ

茶漬食ふ独りに沁みる麦の風

試運転してみる農具初蛙

◆沈丁（7・3）

寶子山報

延びきりのクレーンの高く夏の雲

向日葵や一列通学なれし頃

向日葵や嘘も真も揺れ動く

向日葵の中に星屑吸ひ込まる

向日葵の走光性よ我が人生

向日葵よ飛行機雲となりにつけり

向日葵と跳ね橋飾る美術館

大向日葵強き女の庭に咲く

ひまわりに囲まれ遺影何語る

ひまわり畑で遊ばよみんなスマホ捨て

ひまわりを一顧だにせず郵便夫

◆春野（6・20）

きよ志報

十葉やカードで払ふ入院費

世の隅にゆつくり更へる衣かな

神野美代子

湯本とし子

加藤まり子

久保寺トミ子

田渕 令子

田中 幸子

中野 文子

若村 京子

柳澤ミサ子

田中 恵一

河本 純子

瀧本 敦子

勝木 澄子

菅野 英余

高井 幸子

片野 節子

寶子山京子

尾崎 一夫

二見 和江

城下町今昔 長谷川きよ志

沖に白雲山に緑や鮎解禁
初夏の汀は城下町のエントランス
梅雨入りや届くワクチン接種券
板に乗る蒲鉾興に乗る祭笛
親離れ子離れ軒の夏つばめ
納涼映画「鞍馬天狗」が来て切れる
天守閣が見下す四葩総構
ツンと草いきれワツと来る小鰯刺
⑤消え丸健在盆の月
夏の盛りや板橋地藏尊間近

風の薨 芹澤常子

天領の朝市燕一番子
山越えて父の郷なり桐の花
葦出でし流れのびらか盆が来る
谷卯木ときをり父を振り返り
鬼灯を鳴らし夕汐待ちにけり
有耶無耶の雨の日暮や椎の花
昼顔や汽笛に散れる牧の牛
大宇陀の風の薨や葛桜
灯点りて風おとろふる浮葉かな
残月のかかる端山や孟蘭盆会

緑蔭を真顔になって出にけり
種牛の威厳梧桐風を呼ぶ
城跡に碧き風吹く晩夏光
宵祭娘盛りの打つ太鼓
父の日や父となる子の面構へ
◆たけのこ(7・7)
朝摘みの胡瓜は痛し瑞々し
鉛筆でなぞる唱歌や青ぶどう
洗たくの三竿に余る梅雨の晴
今日一ト日ひとりの世界冷奴
急峻な箱根新道破れ傘
◆香雨・梅ごち(6・27)
噴水に見とれひと言聞き逃す
笙の音を彼方にくぐる茅の輪かな
身の軽くなりゆく茅の輪ぬけてより
梅雨籠バーボンを手にジャズを聴く
雨だれの太つぷ小つぷ濃紫陽花
けだるさのしだいにはぐれ心太
予定なきひと日を籠り半夏生
神木の闇ふかぶかと夏祓
ひと夜さを月下美人とひとつ部屋

秋山 昇
瀬戸 悠
内田知江子
伊藤はる子
長谷川きよ志
悦女報
小宮 早苗
徳田 公子
三木 泰子
久津間百合子
宮崎 悦女
忠山報
肥後さち子
関戸わよこ
青山 典子
門松 鳳文
吉田 百代
吉田 康雄
陌間みどり
小澤 純子
池田 忠山

棒アイス 出澤洋子

棒アイスの棒張り付くや新聞紙
大木の枇杷に取り付く生きものたち
ストリートビューカーに出会す街薄暑
紫陽花の白よ夜明けの青空よ
ジャカラランダ地球の裏より来て咲けり
コ克蘭を捜しコゲラを見て帰る
空梅雨や馬場遺跡の土乾く
落ちやすきものに氷とピーナッツ
はんぽないタマゴ茸の四本や
時鳥トツキヨカキヨク新ワクチン

タンポポ笑う 伊藤道郎

タンポポ笑う赤子が笑う笑う
トマト山盛りまんまる丸の平和
青蜥蜴^と迅し全力はかくも美し
青蜥蜴^ときみが一番若き友
清水呑む青き主張のほとばしる
新緑に飛びこみ手足かがやける
研師来る五月の鋭き風連れて
セルのごいつも簡潔父の文
牛蛙闇の不安を膨らます
友の計を麦熟れ星の運び来る

◆こよろぎ(7・8)

傘買ふてうなぎ食ふ間に雨上がる
涼風の川にうつろふ街あかり
少年の顎^{あご}たくまし夏来たる

◆鷹(7・3)

あぢさゐや二段飛びして山の階
児の傘のひと小間透けるかたつむり
沙羅咲くや理^{うり}のごと雨降り来
案内来て遺作展とは桐の花

富士川の長き鉄橋遠花火

藍染めのスカーフ首に梅雨晴間

並べ干す短靴白し夏休

海鼠壁つづく蔵町梅雨に入る

開け放つ音楽室や青楓

返信の地元言葉やさくらんぼ

針箱に紅絹の端切れや夜の秋

手を洗ふ波待ちにけり雲の峰

地区あげて神社掃除や土用あい

雲行きの速き夕べや軒忍

海霧の去つて貧しきラブホテル

押し寄せる四万六千日の傘

つとむ報

板谷 雅泉

植松テル子

神山つとむ

十五報

青木 孝子

池田 令子

西賀 久實

佐宗 欣二

須田 晴美

中田 笑子

百川 秀子

山崎美知子

庄司 下載

瀬戸 りん

高橋久美子

中山智津子

齊藤 桂

芹澤 常子

畠 梅乃

山口安規子

蟻蟻松の切株占領す

でで虫やひらひら持てる処方箋

松明に風の集まる晩夏かな

家並の急に遙かや立泳

うどん粉を捏ねる木鉢や生身魂

橋桁の暗き影あり夏の鴨

向山に鉄鉗雲の聳え立つ

薔薇紅しわが晩年の夢新た

太宰忌や蔵の二階に畳部屋

ホテルまで畔の近道初蛭

若葉風スローダンスを舞ひにけり

重きドア両手で押せば大西日

雑草に根負けしたり三尺寝

軒先の風に少憩枇杷啜る

亡き人の最後のメール夏椿

暑き日やシーザーサラダ山盛りに

ひもじさに帰宅の者ら夏夕

親と子の集団下校夏帽子

打水や夕さりの雲燃え立てり

西日中パン粉を買ひにひと走り

大木 敬子

大島美恵子

北崎 修

田下 昌人

中根 和子

市川 好子

加藤 幾代

高橋 正子

守屋 まち

米山 翠

來田 新子

大沢 年子

片野 秋子

小林 環

近藤 絢子

下平 美子

杉崎 せつ

鳥海 壮六

古屋 徳男

村場 十五

ガラス器に浮かべて淡き夏椿

森林の見えぬ鳴き声六月尽

人の世の起承転結かたつむり

立たされたことも思い出立葵

暗がりの牛の眼や草いきれ

涼やかな恩師の目もと青き嶺

◆実のり(7・15)

夏暁ゆつくり動く城下町

あめんぼや補助輪外しすいすいと

茅葺きの門の設ひ濃紫陽花

粉葉の喉に絡むや半夏生

◆おほろ(7・14)

蜘蛛の絲舞台が雲の峰のごと

眼差しを高きに誘う夏の雲

緑陰の石分ち合う老い二人

どうなるや双子大熊猫と夏五輪

組板に音階のあり夏野菜

夕焼けや一日が過去となる早さ

峰雲やコ罗纳はヒトに何を問う

早よ帰ろ入道雲が迫り来る

はや二年歌う術なき祭笛

和田恵美子

尾崎 幸子

中山 妙子

尾崎 竹詩

石田加津子

竹下由里子

たか志報

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

昌男報

坂入清四郎

瀬戸とみ子

高橋みどり

中津川春江

中根登美子

中村 昌男

廣田 悦子

二上 光子

横塚 昌平

◆山北(6・24)

由里子報

自転車を立ち漕ぐ君や夏の雲

飲み込んで消化しきれぬ梅雨出水

雨粒を縫って旅する水馬

風を詠み見上げる先に雲の峰

夕餉時ガラス戸に待つ守宮かな

遠き日の形にあれこれ雲の峰

◆零(7・15)

トマト挽ぐふれあい農園朝六時

ミニトマトかわいい色だ採りにくい

鉄砲百合がドバつと咲いてた退院の日

反戦へアガパンサスの花開く

刃物かな才能なのかトマトニミリ

青空の透ける淡雲夏立てり

一期一会これありてこそ夏の山

ハンカチは別れの辛さ知っている

アイコキャロルペペ家系図のばすミニトマト

◆草むら(7・18)

梅雨明の空の青さに染まりけり

崑崙^{こんろん}花道ゆく人にと花名書く

杜若炎上つづけ倒れむと

曖昧な量子の動作半夏生

石井きよ子

石井千代子

小野 菊土

香川 花子

風間 秀泰

加藤 春江

史郎報

青木たけを

井上 良子

川合 昌子

木村 和彦

佐藤 正子

中村 裕子

野川木一路

伊藤 道郎

岡本 史郎

重満報

石井 秀稀

井上 和子

佃 悦夫

佐々木重満

◆無所属

ぽんぽんと叩く西瓜の体脂肪

源五郎語り部として水の中

隣駅見ゆる単線竹煮草

苅り残すねちばなの紅其処此処に

夜すがらの雨をふくみし実梅かな

うたた寝の兎につぶされる夏帽子

田水張る中ガラ空きのロマンスカー

歌うように子にピーマンを食べさせる

自墮落よこの甘酒のほろ苦し

萍の花に鯉の尾鰭のやわらかく

前方後円墳の扉は固し青葉闇

施設から流るる唱歌星まつり

薫風やシャツ真つ白な通学生

長ぐつは十四センチかたつむり

熱風がかたまり動く品川区

鉄塔の低くなりゆく若葉山

梅雨明けて赤んぼは何でもよく叩く

山百合の大輪咲いた足よろこぶ

どくだみの花芯ひそやかなる闘志

遺言^{いごん}書く八月大名恙なし

小林永以子

須田 聡子

一ノ瀬茂代

出澤 洋子

鈴木久美子

小澤 園子

山田 照子

田畑ヒロ子

穂坂志げる

岩楯恵津子

北村 文江

澤口 文子

木村美千代

岡田 典代

瀬戸 正洋

青木 勝子

大石 雄介

大石 和子

杉山あけみ

山口 千代

石井千代子

父となる産声聞くや春暁

菅野 英余

(令和3年3月号)

二人の生活に新たな命が加わる。妻は十か月お腹と対話して母となる。夫はよくわからないまま出産に立会い、夜通しの不安の中、東の空が白々と明け始めた時に「おぎゃあ」との産声に一変、喜びそして安堵する。

春暁の響きには、父親となる確信と妻への感謝があり、新たな一歩の始まりの句としていただきました。

門松 鳳文

陽の匂ひ余るほど浴び干大根

木村美千代

(令和3年3月号)

「陽の匂ひ」とはどんな匂いであろうか。太陽の光、日差しそれともエネルギー。太陽は地球上の万物が生きるうえで必要不可欠なものである。通常は太陽の力を借りて、強く大きくなるが、干大根は太陽の力を一身に浴びて水分を飛ばし大根の旨味を凝縮するのである。干大根はこのあとたぶん漬物とかに加工されて、さぞ美味しくなって食卓に上がることであろう。干大根の美味しさが伝わってくる一句になっていると思います。

城苑俳句・秋の部

(合同句集第十二集より近藤久江抄出)

和田恵美子	和田 環子	渡辺喜久枝	青木 勝子	青木 孝子	青木たけを	青山 典子	秋山 昇	足立 和子	新井たか志	飯田 愛	池田 令子	石井きよ子	石井千代子	石田加津子	石田 和代	板谷 雅泉	故市川 恵子	市川 好子	
しずもりし丹沢の湖今日の月	方言で鳴くみちのくの虫時雨	暮秋の拾ふタクシー残り香す	秋夕焼このごろ涙もろくなり	目くばせに踊の輪より離れけり	じゅつと鳴る男鹿の落暉や赤蜻蛉	行く秋の北の大地の日ざしかな	己が影に追はれせかさる秋遍路	透く秋の水にうつしぬ我が心	大津絵の鬼と一献秋ともし	ひぐらしや父の名もある忠魂碑	床の間の南天の実と琴柱かな	どんぐりの転げて午後はよく晴れて	日陰にも一本すくつと赤カンナ	錦秋や刻が止まりし濃き一日	草もみじ画板の子らのちりぢりに	骨作る注射にも慣れた高し	黄昏の雨のあがりて秋の虹	新涼や料理のレシビ切り集め	かりがねやわたくし雨の天守閣

高井 幸子

豆の花あちらこちらに声を挙げ
新じゃがの一片むけて美人肌
馬鈴薯の花背伸びして隣見る
小屋主は狸となりぬ芒種かな
夕植田白鵲鴿のラブコール

岡本 史郎

夕焼くる夫婦別姓表札に
血縁よりも社縁老人ホームは星祭り
九条や兵戈無用と短冊に
自助心と煽る国とやトマト切る
黒塗りを透析せねば赤薔薇で

小宮 早苗

磯菜摘む我青春の友とゐて
夜桜のあやしきまでの白さかな
今日はけふばかりの命沙羅の花
木下闇この道がまた楽しくて
世を経りし涼しき寺の太柱

石田加津子

なめくじり朝日の照らす銀の径
親指を隠す迷信木下闇
敷石のぐらつく稲荷苔の花
目に染むる甘夏の汁青い空
駐在の非番に見入る目高かな

香川 花子

咲きそろう思いのままに二輪草
山の霧晴れるを待つて二輪草
遙かなる道を和わす二輪草
幸せの姿寄りそう二輪草
共に生き年を重ねて二輪草

(城苑俳句続き)

栗抜く本の終りやちちろ虫
聞こえさう菊人形の息づかひ
仔犬抱く流星攫うようにかな
群なして海には鰯空に鶺鴒
ゆく秋の水脈に漂ふ入日かな
渡り鳥犬に何かを告げたらし
右左山道のほり花野風
安房の海とんびがくるり秋を引く
菓子折の栗ひらりと落ちて秋
飲食に座して新藁ふんはりと

※無所属の方へお願い

投句の締切は毎月19日必着。整理の都合上俳句記載面に作者名を記入・葉書又は葉書大の用紙にて。

理事会日程 9／9、10／14、11／11

令和3年度小田原文化の日俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「文化の日」「賜」(いずれも傍題可) 各一句

一組 未発表作品に限る。

締切 令和三年九月九日(木) 必着

整理費 一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒250・0208 小田原市下大井二九一

田中幸子宛(☎〇四六五―三七七―〇八九二)

*作品は投句原稿どおり印刷しますので、楷書で、

大文字、小文字をはっきりとお書き下さい。

*第二部への参加・不参加もご記入下さい。

選者 協会役員及び各地有力作家

賞 小田原俳句協会会長賞以下二十位、選者特選賞

第二部 俳句大会

日時 令和三年十一月三日(文化の日)

会場 小田原市民交流センター(通称UMECO)

受付 十二時 投句締切十三時

開会十三時半 終了十五時半(予定)

整理費 五百円(呈飲み物)

当日題 秋季雑詠二句 総互選

賞 小田原俳句協会会長賞以下五十位

本大会の寿齢者表彰の対象者は次の通りですので奮

つてご投句下さい。

※寿齢者表彰対象(協会員)

卒寿 (S 4・10・7) S 6・11・3 生れ

米寿 (S 6・10・7) S 8・11・3 生れ

傘寿 (S 14・10・7) S 16・11・3 生れ

喜寿 (S 17・10・7) S 19・11・3 生れ

古希 (S 24・10・7) S 26・11・3 生れ

還暦 (S 34・10・7) S 36・11・3 生れ

〈主催〉小田原俳句協会 〈後援〉各地俳句協会

秋の吟行会のお知らせ

日時 令和三年十月十日(日)

会場 小田原フラワーガーデン 小田原市久野

三七九八―五 ☎〇四六五―三四―二八一四

受付 十三時〜十三時三〇分 当日嘱目三句を短冊にて

会費 五百円(賞品・参加費などに充当)

句会 十四時より総互選 *会場は食事不可のため、

各自吟行、食事を済ませて会場へお越し下さい。

*時節柄マスク着用、席は一つ飛ばしに、水分の補給

も心掛けて下さい。

参加申込・電話又は葉書にて九月三十日までに

〒250・0854 小田原市飯田岡四八―一三三

岡本史郎宛(☎〇四六五―三八―二八二八)